

昭和が終った日

—天皇「崩御」のニュースはどう受け取られたか—

市川 孝一

The Last Day of the Showa Era

—Responses to the news of Emperor's death—

Koichi Ichikawa

はじめに

本稿は昭和天皇逝去の直後に実施した「緊急アンケート」の結果の一部を報告するものである。従ってこれから示すものは論文というよりも、これ自体が一つの基礎的なデータというべき性質のものである。1989年1月7日、昭和天皇の逝去のニュースが伝えられた。“X-DAY”が現実のものとなったのである。この“X-DAY”を人々は日常生活のなかでどのように受けとめ、どのように感じ、行動したのか—興味深い問題である。筆者も研究会のメンバーの協力を得て、表-1のようなアンケートを行った（回答スペースは省略してあるものもある）⁽¹⁾。予想はされていたものの何分にも急な話である。今から振り返ればあれも聞いておけばよかった、こういう聞き方をすればよかったと反省ばかりの多い不完全な調査ではある。対象も大学生という限られた層に過ぎない。しかし、それにもかかわらずこれはこれで十分に価値のあるものと思われる。なぜなら、この種の調査はこのときにしか出来ない正に一回限りのものである。この時期にタイムリーに行なわれなければ意味を失ってしまう性格のものである。さらに回答者となった学生たちが、実に熱心に

かつ率直にホンネを語ってくれた。その意味では想像以上の成果が得られた。そこで以下の分析では、なるべくそれらのナマの声をそのまま伝えたいと思う。数量化できる部分は数字でも表わすが、それ以外は自由記述の回答の面白さを生かしていきたいと考えている（なお今回の分析では、Q1からQ6まで扱うことにする）。

調査の対象と方法

対 象	都内および埼玉、神奈川のABC三大学の大学生311名 (男子 144名 女子 167名)
調査実施時期	1989. 1. 9~13
方 法	授業時間などに質問紙を配布しその場で回答させ回収

結果と考察

〈ニュースへの接触〉

まず、Q1は天皇死亡のニュースをいつ、どのように知ったかを問う質問である。まず「いつ」に関しては、図-1に示してあるように1月7日の午前8時という回答が87(28.0%)で一番多かった。「7時55分」と「崩御」発表の正確な時刻を答えるものも少なくなかった。事実関係をここでもう一度確

天皇(昭和天皇)死亡に関するアンケート

Q1. あなたは天皇死亡のニュースをいつ、どのように知りましたか。

____月____日 ____時 AM・PM

何から_____ or 誰から_____

Q2. そのときあなたはどのように感じましたか。

Q3. そのニュースを誰かに知らせましたか。

誰に_____

どのように_____

Q4. テレビや新聞のニュースにどのように接しましたか。(該当するものすべてに

○をつけて下さい)

1. 号外をもらった。

2. 新聞を買った。

新聞の具体名_____

3. テレビをいつもより長時間見た。

1月7日 約_____時間

1月8日 約_____時間

4. テレビを見ずにビデオを見た。

5. その他(具体的に_____)

Q5. 特別編成番組のテレビをどう思いましたか。

Q6. 天皇の死亡により、あなた自身の予定で何か変更したのがありますか。

1. ない 2. ある(具体的に_____)

Q7. 「平成」という新しい元号をどう思いますか。

Q8. 元号制についてどう思いますか。

Q9. あなたにとって、昭和天皇はどのような存在でしたか。

Q10. 天皇や天皇制について感じていることを自由に書いて下さい。

調査実施日 1989年1月()日 回答者()歳 男・女

表-1

認しておく、1月7日午前7時55分、宮内庁で藤森長官が、「天皇陛下におかせられましたは本日午前6時33分、吹上御所において崩御あらせられました」と発表。同時に首相官邸でも小淵官房長官が「崩御」の発表を行っ

た。これが正式な第一報である。したがって、それ以前の時間を答えているものは、時間を勘違いしたか、その前の「危篤」の発表と混同したものと思われる。危篤については午前6時35分宮内庁の宮尾次長が、「天皇陛下が本

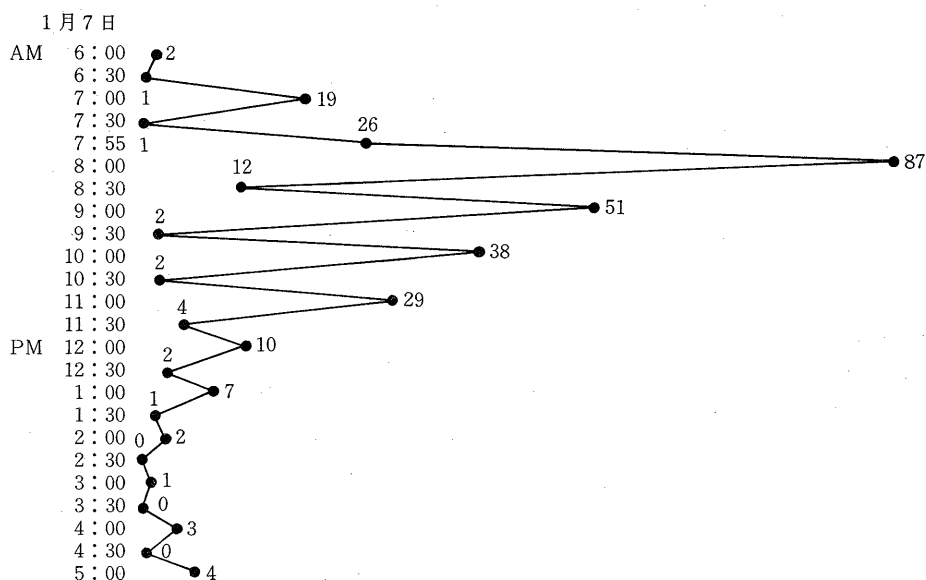


図-1

日午前4時過ぎ、ご危篤になられた」と発表、首相官邸でも小渕官房長官が同様の発表を行っている。「崩御」の時間よりあとに「危篤」の発表があったという奇妙な矛盾についてはここでは問わないが、これらが正式の発表として実際に伝えられたものである。いずれにしても、8時という回答も第一報に接したものと見なしてもおかしくはない。そうすると8時までに何らかの形で「崩御」関連のニュースに接した者は135名となり、回答者の43.4%に達する。これは一般に朝の遅い学生が対象であることを考えるとかなり高い数字だと思われる。ニュースを知った一番遅い時間では1月7日「午後9時」と答えた者が2名いた。逆におそらくこれが一番はやく知っただろうと思われるのは、「ファミコンを朝までやっていてTVを切りかえたら危篤のNEWSをやっていた」「そのとき」と答えた女子学生であろう。

次は、どのようにを「何から」と「誰から」でたずねた。「何から」では「TV (テレビ)」が140 (45.0%) で圧倒的に多く、ついでラジ

オの30 (9.6%) である。ラジオの場合は「FM」で「FM 放送で」と答えるものが目立った。そのほかでは「NHK ニュース」あるいはただ「ニュース」と答えたものが7件あった。新聞では「号外」という答えが3件、ただ「新聞」と答えたものと「夕刊」がそれぞれ1件あっただけである。それ以外の具体的な回答の中で変わったものには次のようなものがある。「パチンコ屋に貼ってあった追悼文より」(男)「銀行の巾旗を見て」(男)「サンクス(注-コンビニエンスストア)の日の丸を見て」(男)「市の放送」(男)「防災放送が消防デモンストレーションを自粛するということを知った」(男)「店の放送で君が代が流れたから」(女)等。

「誰から」の結果は表-2に示すとおりである。家族の成員のいずれかからというのが、81 (26.0%) で一番多い。その中では母親が55 (17.7%) と大きな位置を占めている。友達からというのがそれにつづくのは予想通りの結果だが、「電話で」と明記したものが8件あったのは興味深い。これはコミュニケーション

誰から		誰に	
母親から	54	母親に	12
～電話で	1	父親に	2
父親から	10	親(両親)に	3
親(両親)から	4	兄に	2
兄から	1	弟に	7
弟から	2	姉に	2
姉から	1	妹に	9
妹から	1	家族に	8
祖母から	1	友達に	41
祖父から	1	塾の生徒に	2
家族(の会話)から	3	先輩に	1
友達から	20	彼女に	1
～電話で	4		
サークルの先輩	2		
後輩の電話	1		
塾の生徒	3		

表-2

ョン(口コミ)のメディアをはっきりと質問していればおそらくもっと増えたと思われる回答である。これに関しては「どのように」のコミュニケーションのメディアをもっと詳しく問うべきであった。「先輩から」「後輩から」「塾の生徒から」などは学生ならではの回答である。

〈ニュースの伝達〉

Q2は飛ばしてQ3の結果を先に示しておこう。これは天皇がなくなったというニュースを誰かに知らせたかという問いだが、この問いに対しては無記入(NA)のものが121(38.9%)と目立った。「知らせない」「特に誰にも言わない」「知らせない、既にみんな知っていた」などの回答も含む)も85(27.3%)と多い。「知らせた」という回答は表-3に示すように相対的には少ないが、その中では「友達に」の41が目立っている。しかもこのうち21は「電話で」と明記してある。「先輩に」「彼女に」の場合も「電話で」である。このように「知らせた」者は全体からみれば数は少ないが、どのようにの部分には実に多種多様な回

答が出てきていて面白い。例えばニュースを伝える場合の表現も「母に／天皇陛下が御崩御なされた」「友人に／天皇さまが崩御なされたって知ってる？」(女)「友人に／天皇が亡くなったんだって」(女)「友人に／天皇陛下死んじゃったんだってね」(女)「妹に／てんちゃんが死んだよ」(女)など様々である。また、「家族に／天皇が死んだと大声でわめいた」(男)「母に／二階から叫んで大騒ぎをした」(女)「親に／大変な事になったと」(男)「友人に／(つまらない事のように)天皇が死んじゃったしね」(女)など感情的なコミットメントの度合いもいろいろである。その他「友人に／昼まで寝てる奴なので電話で起こして」(男)「弟に／まだ寝ていたので起こした」「塾の生徒たちに／天皇制あるいは政府がどうなるか見ていなさい」(男)などの答えもある。

〈マスコミ接触行動〉

Q4はX-DAYのマスコミ接触行動のあり方を聞いたものである。まず単純に集計できる項目は表-4に示す通りである。

普段取っているものに加えて他紙までを購入したと答えたものは少なかったのに対し、「号外をもらった」人は予想外に多かった。「ビデオを見た」人もそれなりにまとまった数字として出てきている。以前ゼミでX-DAYはどのようなになるかが話題になった時、学生の一人が、「レンタルビデオ屋がもうかる」と発言して驚かされたことがあるが、これは決して突飛な意見ではなかったのである。実際にX-DAYを迎え、テレビの特別編成が実施された二日間はレンタルビデオ店には客が殺到し、めばしいビデオは出払ってしまったとい

1. 号外をもらった	73(23.5%)
2. 新聞を買った	25(8.0%)
4. テレビを見ずにビデオを見た	46(14.8%)

表-4

う報道もなされた。(2)

〈3. テレビをいつもより長時間見た〉の結果は、図-2・3に示す通りである。1月7日では、「5時間」のところにピークがあるのに対して、1月8日になると、ピークは「2時間」「3時間」のところに移ってきている、視聴時間の絶対量も明らかに減少している。このあたりの事情は、Q5に対する回答と重ねてみるとよくわかる。

〈5. その他〉で具体的な回答として上げられたもので特に目についたものに最後にふれておくことにする。一番多かったのは、「ずっと

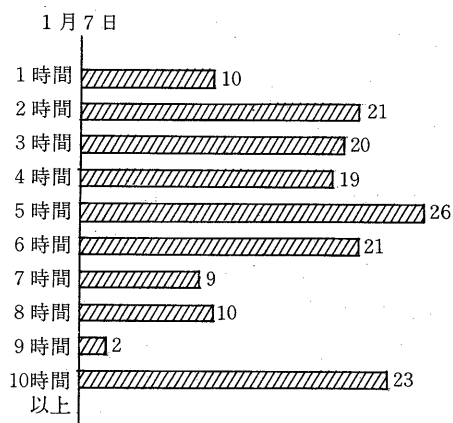


図-2

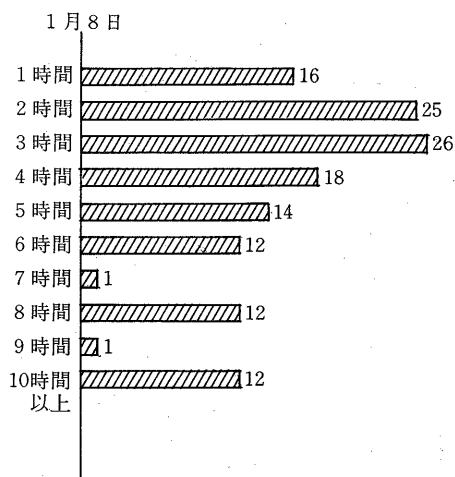


図-3

ラジオを聞いていた」(男)「ラジオをつけっ放しにしていた」(女)などラジオを聞いていたというもので、14件あった。「いつもと同じ」

(男)「普通通り」(男)「特に変化はなかった」

(男)のように、特にいつもと違った行動をとったわけではないと答えるものも9件あった。また、テレビ視聴に関しても、「テレビはつけていたがいつもより短時間」(男)「いつもより多く見たわけではない」(女)など特に長く見たわけではない、いつもと同じ、いつもより少ないという回答が合わせて7件あった。このあたりは“大きな事件があったときにはマスコミ接触は多くなるはずだ”という調査者側のマスコミ論の常識が見事に裏切られたということになる。「つまらないので見なかった」(女)「TVも見ないし、新聞も読まない」(女)「何も見ない」(男)「テレビは持っていない、新聞は取っていない」(男)という“拒否派”も少数ながらいた。

もちろん熱心なマスコミ接触行動もみられる。「新聞をじっくり読んだ」(女)「7日の新聞を隅々まで読んだ」(女)「新聞の記事を比べた。児童館にアルバイトに行っていたので、朝日、毎日、読売、埼玉の各紙を読み、その他赤旗を読んだ」(女)などのようにいつもより熱心に新聞を読んだり、「『アエラ』の臨時増刊を買った」(男)「雑誌『NEWSWEEK』の臨時増刊号を買った」(男)「雑誌約4000円分購入」(男)など特別に雑誌を買い込んだり保存すると答えたものがそれぞれ8件ずつある。また、「総合テレビをずっと録画」(男)「元号発表の瞬間などトピックをビデオに録画した」(男)のようにビデオで記録したものが4名いた。その他では、「NHK教育テレビを見た」が4件、「テープを聞いた」(女)「音楽を聴いた」(女)というものが同じく合わせて4件、「情報収集の手段として」(女)「基本的な知識を知るためニュースだけは見た」(男)などのようなクールな選択視聴が3件あった。

もちろん熱心なマスコミ接触行動もみられる。「新聞をじっくり読んだ」(女)「7日の新聞を隅々まで読んだ」(女)「新聞の記事を比べた。児童館にアルバイトに行っていたので、朝日、毎日、読売、埼玉の各紙を読み、その他赤旗を読んだ」(女)などのようにいつもより熱心に新聞を読んだり、「『アエラ』の臨時増刊を買った」(男)「雑誌『NEWSWEEK』の臨時増刊号を買った」(男)「雑誌約4000円分購入」(男)など特別に雑誌を買い込んだり保存すると答えたものがそれぞれ8件ずつある。また、「総合テレビをずっと録画」(男)「元号発表の瞬間などトピックをビデオに録画した」(男)のようにビデオで記録したものが4名いた。その他では、「NHK教育テレビを見た」が4件、「テープを聞いた」(女)「音楽を聴いた」(女)というものが同じく合わせて4件、「情報収集の手段として」(女)「基本的な知識を知るためニュースだけは見た」(男)などのようなクールな選択視聴が3件あった。

それ以外では、「買い物にでかけた」(女)「遊びに行った」(男)「スキーに行っていた」(女)など外出組も合わせて13件、「バイト」という答えも4件あった。変わったところでは、「同じ日に死んだ人(祖父)の葬式に出た」(男)「祖母の法事だったのでテレビにも新聞にも目をむけている時間があまりなかった」(女)などという回答もあり、正に世の中いろいろである。

そうした世の中の様々な人生模様が見られるということの関連で言うと、Q6の結果を先に見ておいたほうがいい。これは天皇の死亡が、回答者自身の行動に直接に何か影響を与えたかを聞いたものである。この問いに対しては、圧倒的多数は「ない」と答えている。つまり、大多数の人は予定を変えるなど行動のレベルでは全く影響を受けていなかったのである。

「ある」と答えて具体例を示した人は全部で40名と少数ではあるが、答えの内容は様々でそれなりに面白い。複数でてくるものを上げると、「年賀状の返事を出すのをやめた」(男)「年賀状の返事を寒中見舞いにした」(女)など年賀状がらみと、「ラグビー、サッカーの試合が見れなかった」(男)などスポーツ関係がそれぞれ4件あった。「バイトが中止になった」などアルバイトがらみのもの、「成人式が1/8だったが1/15になった」(男)「1/8に両親と成人式のための着物を下見に行くはずだったがとりやめた」(女)など成人式がらみのものがそれぞれ3件あった。「丸井のバーゲンに行かなかった」(女)など買物をやめたというものと「コンサートが中止になった」(女)というものがそれぞれ2件あった。それ以外では「新年会が延期になった」(男)「ゼミのレポートを書かなければならないところをやめて、皇居 watching 及びマスコミ観察及び天皇の戦争責任問題を考えねばならなくなった」(男)「遊びに行こうとしたところ、行ったところが休みだったので記帳しに行っ

た」(男)や「勉強をやめてパチンコ屋へ行った。そして打ち止めにしてしまった」(男)というのんきなものもある。

〈ニュースへの反応〉

順序は前後したが、次にQ2の結果を示しておきたい。これは天皇死去のニュースに接したときどのように感じたかを問うものだったが、圧倒的多数が「とうとう・・・」という感想を述べている。「とうとう亡くなったのかと思った」(女)「とうとう死んじゃったか」(女)というのが、その典型的な回答だが、それに「ついに・・・」という表現を含んだ回答を加えるその数は、116(37.3%)に達する。その次に多かったのは、「昭和という時代が終るんだなあ」(女)「一つの時代が終ったと感じた」(男)など、時代の転換点・区切りを意識させられたという回答が31件あった。その次に多かったのは、「来るべきものが来た」「来るべき時が来た」というもので20件、「やっと死んだか」(女)のように「やっと・・・」という表現を含むものが、13件でこれに続く。

このようにほとんどの人は事実を事実として冷静に受け止めているが、それに対しそのときの感情の動きを率直に表明しているのものもある。「言いようのないショックを受けた」(女)「予期していたことだが、ショックで名状し難い複雑な感慨に襲われた」(女)「軽いショックを感じた。またそういう自分にも驚いた」(男)「大ショック・・・」(男)など衝撃を受けたというものが数件⁽³⁾、「気持ちがあぐつと沈んで悲しい思いをした」(女)「悲しかった」(女)「何となく寂しく感じた」(男)など「悲しい」「寂しい」という感情に触れたものが9件あった。逆に、「特別な感情はなかった」(女)「別に何とも思わなかった」(女)「考えてたより感慨がわかかなかった」(女)と突っぱねているのも数件ある。いかにもこの世代の若者らしく、「えっ!?!」「うそーっ」「うわーお」「えっー、まじ!」などと感嘆詞だけ

で答えているものも数件ある。(4)また、「ハレ一彗星が76年ぶりに姿を見せる最初の瞬間に立ち会う時にはこのような気持ちになるのではないかと思われる」といった興奮を覚えた」

(男)「・・・少し『革命』前夜のような興奮を覚えた」(男)「・・・妙に「奮した」(女)などという回答もあった。さらに「驚き」ということに関して言えば、「予測していたことなので、特に驚かなかった」「予感はしていたものの驚いた」という感じ方が半々である。

これ以外には、「やっと楽になれたんだなあ」「やっと解放されたな」と天皇に同情する感想も何人かの回答者から示されている。「やっと楽にさせてもらえてよかったという思いがした。何となく無理して、延命されているような気がしたので・・・」(女)という答えがその代表である。また「崩御」の発表時期に関して、「筋書通り」「タイミングがよすぎる」と疑念をはさむものもいくつかあった。

「正月明けの早朝、土曜日では生活に支障を来さないではないか！ さらに仏滅だな・・・と思った」(女)「・・・“タイミングがばっちり”と思った。土曜日だから官公庁は動いて民間企業は休み、つまり社会に与える影響が一番少ない。少し作為的なものを感じた」

(男)「・・・私は知り合いの人から天皇が1/7か1/8になくなると聞いていたのであーやっぱりと思いました・・・」(女)などというのがそれである。天皇の病状悪化が伝えられたある時点以降は、“天皇はすでに亡くなっているのではないか”という噂が結構根強いものとして存在していたのでこのように感じた者も少なからずいたようである。

変わったところでは、「マスコミはどのように放送していくのだろうか」と関心を持った」

(女)「今日一日世の中どう動くのかなあと思った」(女)「今日一日日本はどうなるのだろうか」(女)と世の中の動きやマスコミの対応を考えるものや「新しい元号は何になるんだろう」(男)と心配するものもあった。ここでも、

「学校が始まってからだったらよかったのに」(男)(女)「中央競馬、そのほかギャブルは中止だな！ ディズニーランドはやっているのだろうか。もし開いてたら、すいているかも？」と感じた」(男)などというのきな回答もある。

〈特別編成番組について〉

最後に、特別編成になったテレビについてどう思ったかを聞いたQ5の結果を見ておきたい。この部分は、無記入が皆無に近いほど各回答者が熱心に答えてくれている。そこで示されている回答も実に表現が多種多様で、単純な数量化は出来ないし、しても余り意味がないだろう。ただ全体の大きな傾向として、否定的な意見と肯定的な意見との比率は約8：2の割合であったことを先ず最初に紹介しておこう。(5)

圧倒的多数の否定的意見の中で繰り返されているのが、「過剰」に対する批判である。それは、「くどい、しつこい、やりすぎ」(男)という意見に集約される。「くどいっっっ!!」(女)という表現に反発の強さが表われている。“どの局(番組)も同じような内容の繰り返しで”「つまらなかった」「退屈だった」「うんざりした」「うっとうしかった」などの答えが、それこそうんざりするぐらいたくさん出てくるのである。また過剰に対する批判は、二つのパターンにまとめることができる。一つは、「NHKがやりたいのなら仕方がないが、民放までCMもやらずにやる必要はない」(女)に代表されるように、“NHKだけやればよい。民放は各局が独自性を持って良かったはず”という意見である。それは「楽しみにしてした番組があったのに、バカヤローってカンジ。行く年来る年みたいなのにどのCHANNELも一緒なんだもん。あーゆーのやめてほしい」(女)という素朴な反発から、「・・・教育テレビはけっこう普通にやっていた。それがせめてもの救い」(女)「民放キ

一局すべてなんてひどすぎる。一局ぐらい普通にやると思った。『右へならえ』の日本はやはり恐ろしい国です」(女)と明確に画一化批判とそれへの危惧を示すものまで幅も広いが典型的な多数意見の一つである。もう一つは、絶対量の多さに対する反発と批判である。「7日はまだしも、8日になるとうんざりしてきた」(男)「7日は仕方ないとしても、8日も一日中はやりすぎ」(女)などの“何も二日もやることはないんじゃないか”という回答が頻繁に出てくる。ここでも、「史上最高につまらない2日間だった」(男)という実感派もいれば、「2日間見続けたら右翼になる」(男)「ジャーナリズムの死滅」(男)という醒めた批判もある。

特別編成という形式自体に対しても、「あれだけの番組をよく長時間編成していたなと感心した」と素直に感心している意見もあるが、大多数は否定的な受け取り方をしている。そのなかには、「準備されていたかと思うと変な感じ」(女)「・・・前もって用意されていた感じがしてあまりいい感じを受けなかった」(女)というような素朴な反発もあるが、「天皇死去を想定したスペシャル版(あらかじめの作り置き番組)のようなものがあつた、商業主義の根強さを感じた」(男)「言論の自由を標榜する報道機関が、何らかの圧力に屈するものでもなく、自発的に大本営発表の伝達機関として統一される可能性はあり得ることをはしなくも示した」(男)というような明確なマスコミ批判も少なくない。「かなりインパクトが強く洗脳されていくみたいだった。天皇制を国民に(特に若い世代に)に植えつけた感がある」(女)「TVのようなメディアであるそこまでやるのは、国民の意識が操作されるような気がして危険な感じがする」(男)「テレビのすべての出演者によるウソでぬりかためられた天皇親に対して大いに情けなく怒りをおぼえ、マスコミの偽善性、情報操作と日本のウソっぱち民主主義に絶望した」

(男)のように情報操作の危険性にふれるものもある。

内容に関する批判の中で何人もの回答者から共通に指摘された多数意見は、“天皇賛美”に偏った内容に対する批判である。「・・・昭和天皇の人間像(お人柄)に関しては、“死んだ人のことを悪く言うものではない”といったような天皇賛美にかたよる傾向があると思った。この昭和史と天皇賛美が結びつき、戦争責任等の点(負の点)があいまいになるのではと思った。また天皇に対してのみ特別な尊敬語を使用するアナウンスも気になった」

(女)「番組自体は必要だったと思うが、『天皇のお人柄をしのんで』というののゲストとして出てきた人の、天皇に対するほめちぎったコメントが嫌だった」(女)「同じことばかりやって・・・ほめたたえることばかりやって、「何だ!?”と思った」(女)「いいかげんにしてほしい。マスコミの力で天皇を美化しないでほしい」(女)「・・・天皇の美化が強すぎる。“死んだ人の悪口を言うな”という日本人の心性が、問題(天皇制・天皇性)を隠してしまった。そしてわれわれはchoiceされた戦前・戦後の歴史を見ることになった。子供たちの欠如された現代史はこうして埋め立てられた」(男)などがそれである。

一方2割強を占める肯定的意見のほうだが、この中で一番多かったのは、“昭和史の勉強になった”“歴史の勉強になった”“昭和を振りかえるにはいい機会だった”というものでこれはかなりの数があつた。「昭和史のいろいろな映像が見られておもしろかった」(女)「自分の知らなかった昭和の顔を詳しく見れて良かった。ためになった」(女)「昭和の歴史をふりかえる意味でよかったと思う」(女)「あらためて昭和史の勉強になった」(男)「昭和時代をふりかえることができてけっこう楽しかった」(男)などがその代表的なものである。現代史については学校でもあまり教わる機会のない大学生たちの若い世代にとっては、

昭和の古い映像は新鮮なものに映ったらしい。類似の感想に“あまりよく知らなかった天皇や皇室のことがよく分かった”というのもいくつかあった。

さすがに“面白かった”“よかった”と答えるものはほとんどいなかったが、“当然のことである”という答えが数件、“仕方がない”という消極的容認派は10件近くあった。中には「何度もあることではないから、あのくらい大げさなくらいがよいと思った」(男)「予想していたより、つまらなくなくて、興味深かった。天皇が死んでしまったら、一週間ぐらいクラシックばかりをずーっと流していると聞いていたので、考えていたより苦ではなかった」(女)などという意見もある。

肯定的意見の中身は以上のようなものだが、最後にその他一二のトピックについての意見を見ておこう。一つはCMについてである。CMに言及した感想はいくつかあるが、まず「民放がコマーシャルを流さないで放映している！」(女)「コマーシャルがないというのは妙だなあ」(女)「CMのないテレビは異常に感じた……」(男)とCMなしの放送に違和感を感じ、「民放はCMなしで大変だろうと思った」(女)と心配したり、「何もCMまでなくす必要はないと思う……」(女)と感じたりしている。「……CMが全く入らないのはいいと思った」(男)「……CMがなくて落ち着いていた……」(女)という意見があるかと思うと、「民放でのCM抜きなのははじめはよかったが、区切りがないので疲れた」(女)という感想もある。またビデオに触れたものでは、「……ビデオ屋さんが繁盛してるだろうと思った……」(女)「ビデオを買っておけばよかった」(女)「はっきり言って迷惑でした。レンタルビデオを結構借りたのでビデオ代を返してほしい」(女)などというのがある。

具体的な番組に言及したものでは、「テレビ朝日の『討論』が面白かった」(女)「……

ただ、1/8のテレビ朝日の討論会だけはかなりまともだった」(男)「……ただこのような時期にテレビ朝日で、皇室についてのバクロ話や討論会を行っていたのは勇気のあることだと思った」(女)「……ただテレビ朝日の日曜夜の討論が出色でした」(男)「……しかし、テレビ朝日は比較的バランスを取っていたと感じた」(男)などがあり、なぜかテレビ朝日の評判がよかった。

さらに少し変わり種を拾っておくと、「同じことばかりの繰り返しでキャスターも大変だなあと思った……」(女)「全部のチャンネルがそうだったので、子どもはかわいそうだなと思った……」(女)「……これが1月1、2、3日の出来事であったならば放送局はCMのキャンセル料で大打撃を受けたであろう。また大金をかけた番組が御蔵入りするもテレビ局は迷惑しただろうと思った……」(男)「昭和はいろいろなことがあったから、何とか時間を埋めることができたと思うが、平成が終わったときのテレビはつまらないだろうと思った」(女)と同情したり余計な(?)心配をしているものなどがあって面白い。

おわりに

以上調査結果の概要を見てきたわけだが、冒頭でも書いたように回答者となった学生たちの熱心でかつ真剣な回答態度にまず感心した。対象となった学生たちがたまたまそうだったのかもしれないが、彼等を見るかぎりでは決して「無関心」ではない。また、さすがマスコミ世代だけに、成熟した視聴者としてそれなりの批判精神も持ち合わせているようにも思われる。ただ、心配なのは一部の消極容認派の学生たちだ。「仕方がない」と現実を受け入れ、大勢に追随してしまう悪しき平均的日本人の大人の予備軍に映るからである。またもう一つ危険だと思うのは、時の経過に伴う“歴史の風化”である。もともと、歴史を

世代を越えて伝えることに不得手で不熱心な日本人である。知らされていないものを、知らないが故に新鮮と感じ、それに魅力すら感じてしまうというメカニズムはちょっと危ない。一部の学生の回答にそれを感じた。

しかし全体としてみるかぎり、回答者の大多数は日本人全体がそうだったように X-DAY を極めて平静に受け止め、日常生活を淡々と(肅々と!)こなしていたわけである。ある回答者が書いているように、「日本中がパニックになるのかなあと思ったが、思ったほど大騒ぎにならなかつた」のである。確かにこれはあの異常なまでの自粛ぶりを考えると、意外な展開だとも言える。しかし、変わり身の早さもまた日本人の特質の一つである。「あっけらかん」の明るい現実主義と呼ばれるものである。あるいは、長かった闘病期間が、鎮静化の効果を発揮したのかもしれない。熱しやすく一気に雪崩現象を起こしてしまう日本人にとっては、これは客観的に見ればいい薬だったのかもしれない。

いずれにしても、一つの時代の終わりは静かに受け入れられたのである。この小さな調査の結果に示されたものは、そのほんの一部一側面にすぎないが、それなりに貴重な資料ではある。ここからさらに様々な意味を読み取ってもらえたら幸いである。

注

- (1) 調査の実施に当たっては、佐藤毅、川浦康至両氏の協力を得た。
- (2) 「7、8日両日、全国のレンタルビデオ店が一斉に、ふだんの2、3倍の貸し出しに追われた。」と新聞は伝えている。「自粛の号令を逃れて—ビデオ人気、テレビの『特番』うんざり」『朝日新聞』1989. 1. 12朝刊。なおこの記事では、7日昼にわざわざビデオテープレコードを購入した会社員の話が紹介されている。

(3) この「大ショック」と答えた男子学生は続いて次のように書いている。「左が暴れなければいいなあ—と思った。後を追おうとは思わなかったが。」また彼は、「私は愛国者。でも暴れないけど!」という書き込みをしている。さらに、質問紙の、「死亡」という表現に対しては、「気に入らん!」とクレームをつけ、御崩御と書き直している。「死という言葉はれーこんの復活を含まないため、高貴者が死んだときには用いるべきではないと私は思う」というコメントも加えている。この対極に位置するものとして「天皇、皇室およびその支持者どもに死を与えよ!」(男)という答えがあった。「過激な」回答はこの二つだけだった。

(4) これらは字の大きさや表記の仕方を忠実に示さないと微妙なニュアンスは伝わらないが、活字では無理である。

(5) 特別編成期間中、テレビ各局にかかってきた電話は、NHKが全国で18000本、日本テレビ1630本、TBS 2420本、フジテレビ1370本、テレビ朝日1490本、テレビ東京420本。半分は番組変更などに関する問い合わせだったが、残りは批判的な内容だったという。「メディアインサイド—苦情相次いだ追悼番組一色」『朝日新聞』1989. 1. 10 夕刊。

参考資料

- 『法学セミナー増刊 検証・天皇報道』、日本評論社、1989
- 『思想の科学—天皇現象』、1989年8月号
- 『マスコミ市民—特集「天皇」とマスコミ』、1989年4・5月号
- 『新放送文化』No. 13、日本放送出版協会、1989
- 朝日ジャーナル編『昭和の終焉1988. 9—1989. 2天皇と日本人』朝日新聞社、1989